

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00406

研究課題名(和文)長崎原爆に回答した英米文学者に関する基礎的研究

研究課題名(英文)A Study on the Responses of Japanese Scholars of English and American Literature to the atomic bombing of Nagasaki

研究代表者

齋藤 一 (Saito, Hajime)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：20302341

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：長崎市で活躍したイギリス文学者の伊東勇太郎、1949年に長崎市を訪問した英詩人エドモンド・ブランデン、1951年に同地を訪問した英詩人G. S. フレイザーについて、これまで知られていなかった彼らの長崎原爆に対する反応のいくつかを、長崎大学経済学部の同窓会雑誌、大学新聞や広報誌、長崎県の有力新聞『長崎日日新聞』の記事を丹念に読むことで明らかにした。付随的に、長崎大学のフランス語教員、引田稔のフランス核実験(ムルロア環礁)に対する反応を調査することになった。伊東と引田については研究論文を公表し、ブランデンについては口頭発表を行った。フレイザーについては今後成果を発表する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

広島市と長崎市に原子爆弾を投下したアメリカや連合国であったイギリスは日本にとって「敵」であり、日本の英米文学者は戦後かつての「敵」の文学を研究することになった。特に広島市や長崎市で原爆を体験した英米文学者は「敵」の文学について厳しく複雑な対応を余儀なくされたはずだが、このことについての先行研究は拙論(2017年)以外にはほとんどなく、拙論も広島市の英米文学者を多く取り上げているという偏りがある。長崎市の英米文学者に注目した本研究は、こうした研究状況に一石を投じ、核兵器の使用という極度の危機に関して文学研究者がなし得ることを検証した。新たな核戦争の危機が迫る現在、この研究は極めて重要である。

研究成果の概要(英文)：In this KAKENHI research, I have mainly studied on three men: Yutaro Ito, a scholar of English Literature in Nagasaki University; Edmund Blunden, an English poet who visited Nagasaki and made lectures in 1949; G. S. Fraser, an English poet who visited the city and made lecture in 1951. I have discovered some of their previously unknown reactions to the atomic bombing of the city by carefully reading articles in the alumni magazine of the Faculty of Economics of Nagasaki University, the university newspaper and its PR magazine, the Nagasaki Nichinichi Shimbun and Nagasaki Minyu Shimbun, two newspapers in Nagasaki Prefecture. In addition, I have happened to know about and have investigated the reactions of Minoru Hikita, a French teacher at Nagasaki University, to the French nuclear tests in the Pacific. Finally, I have published research papers on Ito and Hikita, and made a presentation on Blunden. As for Fraser, I have a plan to publish the results in the near future.

研究分野：英語圏文学

キーワード：原子爆弾 長崎 核ディザスター 英米文学者 伊東勇太郎 Edmund Blunden G. S. Fraser 引田稔

1. 研究開始当初の背景

数万人単位の死者、それ以上の被爆・被曝者をもたらした長崎原爆を作り出し使用したアメリカの文学や文化に対して、直接・間接に原爆を体験した長崎にゆかりのある日本の英米文学者が何も考えていなかったはずはない。アメリカへの強い憎悪、後悔、自身や親族知人同僚学生への健康への不安といった複雑な感情は、当然持っていたと考えるべきだろう。私(齋藤)は、2011年3月の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故のあとに、過酷な核ディザスターのあとに英文学者は何をすべきなのかを模索しはじめた。2012年から広島原爆に直接・間接に回答してきた日本の英米文学者(福原麟太郎、清水春雄、大原三八雄など)について調査をしてきた。その成果は拙論「英米文学者と核時代」(川口隆行編著『原爆を読む文化事典』青弓社、2017年)においてある程度紹介している。

拙論の概要を述べる。英文学者の福原麟太郎は、広島原爆当時は東京に在住だったが、原爆投下後の広島市には何度も立ち寄っている。しかし福原は原爆の惨禍については事実上沈黙した。これは同郷の井伏鱒二とは対照的である。アメリカ文学者の清水春雄は広島市内で被爆したものの幸い回復し、戦後はアメリカの詩人ウォルト・ホイットマンについて多くの論文を執筆、単著も2冊出版した。しかし清水は自身の被爆体験については2回の例外を除いてはほとんど語らず、ホイットマン研究と自身の被爆体験を関係付けることはなかった。対照的なのが大原三八雄である。大原はイギリスの詩人クリスティナ・ロセッティの研究者であり、本人も詩人として活躍した。また戦後の広島市で独自の存在感を持っていた同人誌『Prelude』の編集に関わっていたが、自身の入市被爆者の経験をきっかけとして、峠三吉他の原爆詩を英訳して*The Songs of Hiroshima*(1955)という冊子にまとめ、何度も改訂を重ねて世に問うた。

ただし、上述で明らかであるように、私の研究は広島原爆関連事項に偏っており、長崎原爆については長崎でイギリス文学を研究していた伊東勇太郎について多少の知識を持っているだけであった。その理由は、長崎原爆に回答した、長崎にゆかりのある英米文学者に関する先行研究が極めて少なかったためである。

長崎原爆を経験した被爆者の英米文学者が、戦後も英米文学、特にアメリカ文学や文化を屈託なく研究していたと想定するのはあまりに安易である。彼ら彼女の原爆に対する複雑な感情や屈折した態度などは、明確に原爆や核実験について触れた文章のみならず、論文や研究書の行間や余白からも読み取れるはずである。そうした複雑な感情やねじれた論理を理解しようと試みることは、2010年代における東アジアの核ディザスターを生きる、私を含めた日本の英米文学者が、この危機の当事者であり、核兵器保有国であるアメリカそしてイギリスの文学や文化の何をどのように研究し、その成果をどのように世界に問いかけるのか、そして研究のあり方をこの時代に応じてどのように更新していくことを考えることにつながるだろう。仮に、英米文学研究を通してこうした状況に全く回答できないのであれば、人文系への学問への風当たりが極めて厳しい現在、英米文学研究の必要性はますます軽んじられることになるだろう。

約言すれば、本研究は、先行研究がほとんど存在しないという状況に対して、そして2018年現在に対する英米文学研究者への回答の仕方を探らねばならないという状況に対して一石を投じるといった意味において、極めて先鋭的かつ学術的な「問い」を背景としてスタートしたのであった。

2. 研究の目的

長崎原爆を直接間接に経験した英米文学者、特にアメリカ文学者の経歴や業績を整理整頓することが本研究の極めて重要な目的となる。

私は上述の拙論(齋藤[2017])において、長崎原爆に回答した英文学者として、現在の長崎大学経済学部の初代学部長を務めた英文学者、伊東勇太郎に触れた。彼は1946年に、米軍関係者の執筆した長崎の悲惨さを歌った英語詩の日本語訳を、当時の『長崎日日新聞』に解説付きで紹介している。ただし、この伊東がその後長崎原爆についてどのように発言したのか、またかつての敵国の軍関係者が書いた英語詩をどのように読み、論じ、教育していたのか、私は詳細に調べてはいない。さらに、拙論では触れなかったが、九州帝国大学を卒業したあと、長崎県で教員を務め、戦後は長崎大学と愛知県立大学で教鞭をとったアメリカ文学者の藤井昌子がいる。藤井は長崎原爆投下時には距離の離れた大村市に勤務していたが、戦後は長崎大学で英語、特にアメリカ文学の大御所であるウィリアム・フォークナーを教育・研究していた。有名な1955年のフォークナー長野セミナーにも参加している。ところが藤井の長崎原爆への対応ぶりや、アメリカ南部作家でノーベル賞授賞者のフォークナー研究への藤井の回答のあり方は全く研究されていない。伊東や藤井の業績を研究するだけでも本研究には学術的独自性がある。

おそらく、他にも長崎原爆を経験・見聞して、アメリカ文学やイギリス文学の研究意義を根本的に再検討した者、それができなかった者はいるだろう。伊東、藤井、そしてまだ私が知ら

ない研究者たちの経歴や業績を調査し、基本的なデータを整理しつつ評価することは、本研究よりも大規模な研究、例えばアメリカやイギリスの文学や文化に対する、日本人英米文学者の屈折した立場や感情を分析し、21世紀における英米文学研究の存在意義を提案する研究プロジェクトのきっかけになるだろう。

3. 研究の方法

長崎原爆を直接間接に経験した英米文学者について、これまで知られていなかった事実を把握するため、長崎県の有力新聞『長崎日日新聞』のバックナンバーを1945年8月から1952年4月まで閲覧した。必要な場合は『長崎民友新聞』のバックナンバーも閲覧した。いずれも長崎県立長崎図書館郷土資料センターに電子版が収録されているのでこれを利用した。ただし、どちらの新聞の電子版も本文をキーワード検索することはできない。やみくもに記事を読むのを避けるため、上述の伊東勇太郎と長崎原爆との関係のある程度把握し、効率的に新聞記事を読むため、長崎大学経済学部附属図書館に収録されている資料、例えば紀要論文や同窓会誌なども活用した。

4. 研究成果

【平成30(2018)年度】

2018年9月と2019年3月に長崎市を訪問し、長崎大学(中央図書館、経済学部分館)において、長崎経済専門学校時代から新制長崎大学経済学部で活躍した英文学者の伊東勇太郎(1889年~1980年)の足跡について調査をおこなった。伊東はウィリアム・シェイクスピア研究者であるが、大学での授業では19世紀の小説や詩(トマス・ハーディ、チャールズ・ディケンズ、ウィリアム・ワーズワースなど)について講義をしたこと、漢籍についての該博な知識を披露していたことなどが、同窓会誌『瓊林』(けいりん)に掲載された卒業生たちの文章から確認できた。

興味深いことに、伊東が長崎原爆について少なくとも2回回答していたことへの言及が、調べた限り卒業生の文章にはなかった。伊東は1945年12月、『長崎新聞』の編集部に請われてアーネスト・ロブソンというアメリカ人軍属の詩を英訳して新聞に掲載した。また、1955年、旧・長崎医科大学正門跡の門柱碑文の英訳を手がけている。ところがこれらについて、同僚の教員の言及はあるが、卒業生たちの言及がないのである。総じて言えば、卒業生たちは、伊東について、西洋東洋の文学に詳しい温厚な知識人というイメージを持っていたが、本研究によって、アメリカ軍による原子爆弾の投下という日米双方にとってのトラウマ的事件に直面した知識人としての営為をさらに明らかにすることで、現代における英米文学研究の意義を再考する必要があることを確認できた。

なお、同窓会誌『瓊林』などを調査することで、伊東の同僚であったフランス文学者の引田稔(1915年~1987年)が、1973年のフランスによる南太平洋ムルロア環礁での核実験に明確な反対の立場をとり、主要新聞『ル・モンド』などの関連記事を分析していたことを知ることとなった。これは研究当初想定していなかった発見であったが、その意義について研究論文を執筆した(「ナガサキで「フランス語の道」を歩んだ人：フランス語教師、引田稔についての研究報告」『文藝言語研究』75巻、2019年、27-46頁：<https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/49486>)。

【平成31・令和元(2019)年度】

本年度は、戦前・戦後の長崎市で活躍した英文学者伊東勇太郎と、1949年に長崎市を訪問したイギリスの詩人、エドモンド・ブランデンについて、主として文献調査を行った。前年度は、旧・長崎医科大学正門跡に設置された「碑文」の英訳に、原子爆弾を投下したアメリカへの「配慮」を読み取る研究ノートを発表したが(「長崎原爆と伊東勇太郎」『文学研究論集』37号、2019年、55-60頁：<https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/54886>)、本年度は1949年に長崎市を訪問し英語で講演を行ったイギリスの詩人エドモンド・ブランデンと伊東との関係について基礎的な調査を行った。

本科研のスタート前に、私は伊東がブランデンの講演に質問をしたという卒業生の回想は確認している。また、本年度においてブランデンの詩集(私家版)の中に伊東に贈った詩があることが判明した。ただし、ブランデンの講演がどのようなものだったのか、ブランデンと伊東との関係については明らかになっていなかった。そもそも全国紙のデータベース検索等では、ブランデンの長崎講演の内容について調べることができなかった。そこで、2020年2月、長崎県立図書館郷土資料室において、長崎県の新聞『長崎日日新聞』と『長崎民友新聞』について調査を行い、ブランデンの講演の内容を把握することができた。それは、例えば英国詩人スティーブン・スペンダーが1957年に広島市で行った、日本の原爆詩を批判しつつT・S・エリオットの伝統論と「荒地」の重要性を強調した講演とは異なり、イギリスのロマン派以降の詩についての教科書的な概説であった。このような概説的な講演に対して、被爆地の英文学者である伊東がどのように応答したのか、あるいはしなかったのかという点については、さらに調査を進める必要がある。

もう一点、長崎での調査中に、太平洋戦争末期の入学者で伊東に英文学を学んだ学生の記述を

発見し、伊東が何を教え、学生がどう受け止めていたのかを確認した。これは論文として発表した
が、発行は次年度になる。

【令和2年(2020)年度】

新型コロナ禍の悪化による移動制限や、長崎市の大学・公共図書館や文書館における、他県
在住者による長時間の資料閲覧の制限または禁止により、英国の詩人で被爆した長崎で講演
を行ったエドモンド・ブランデンについて資料調査を行うことができなかった。そのため、前年度
の研究、すなわち太平洋戦争末期の入学で伊東に英文学を学んだ学生の記述を発見したが、伊
東勇太郎が何を教え、そして当時の学生が伊東の教えた文学テクストをどう受け止めていたの
かという点について、すでに調査した資料を解釈し、論文にすることに努めた。詳細は拙論「学
生が読みかえるテクスト：拙論「長崎原爆と伊東勇太郎」への補遺」(『文学研究論集』38号、
2020年、35-40頁：<https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/records/54891>)に記したが、ここではその概
略を示す。

伊東は太平洋戦争末期に長崎経済専門学校(現・長崎大学経済学部)の学生に、イギリスのロ
バート・リンド(Robert Lynd, 1879-1949)の「よく知られている無関心さ」(“The Old
Indifference”)を教えていた。これは、数百万人単位の犠牲者を出した第一次世界大戦(1914年
1918年)を背景として、知人・友人が亡くなるうとも、偉大な英国の詩人たちが描写したよ
うに空が落ちてくるといったようなことはなく、世界それ自体は人間の生死に無関心である、と
いう内容である。このような内容のエッセイを、中国大陸や東南アジア、太平洋の戦場で世界の
「無関心さ」の犠牲になるかもしれない学生たちに読ませた伊東の意図は不明である。重要な
のは、伊東の心境や意図ではなく、このエッセイを伊東のクラスで学んだ(元)学生たちの主体的
な作品解釈である。学生の一人は、長崎原爆から数十年後に被爆体験を想起する際に、このエ
ッセイの冒頭部を長年記憶しつつ、そのエッセイの文言を微妙に変更し、世界の無関心さというよ
りはむしろ長崎原爆で亡くなった友人を懐古するための導入としている。このことは、文学テク
ストというものが、作者や研究者や教師だけのものではなく学生のものであるということの
好例である。

【令和3年(2021)年度】

前年度と同様に、新型コロナ禍による移動制限や、長崎市・県の大学・公共図書館における、
県外からの来訪者による長時間の資料閲覧の制限(最終的には禁止)により、英国の詩人で被爆
した長崎において、英国政府の文化政策の一環として講演をおこなったエドモンド・ブランデン
などについて資料調査を行うことができなかった。そのため、やむなく以前収集した資料の分析
をもとに口頭発表をおこなった(「エドモンド・ブランデンと原子爆弾 長崎講演と『日本遍
路』(1950年)を中心に」、筑波大学比較理論文学会、2022年2月12日)。

以下ではこの発表の概略を述べる。ブランデンは数度にわたって来日しているが、占領下の日
本を1947年から1950年にかけて、イギリス政府の対日文化政策、すなわち英国をも敵視した
日本政府の戦時政策による日本人の英国に対する敵意を緩和するために、東京大学を拠点とし
て教育活動をしつつ、全国各地で英文学の講演を行った。この講演旅行の一環として長崎市でも
講演を行ったが、地元メディアでの報道で確認する限り、イギリスのロマン派の詩人、特にウイ
リアム・ブレイクの紹介であり、原子爆弾の投下には一切触れないものであった。

この講演から1年後にブランデンは離日するが、そのあとに英語と日本語訳の合本の形で出
版した日本滞在記『日本遍路』(1950年)においては、長崎原爆の爆心地を垣間見たことに触れ
ているが、あくまで(原爆投下や被爆という)「過去」ではなく(復興という)「未来」を見よう
と結んでいる。これこそがイギリス政府がブランデンに望んだ言葉だと考えてもよいだろう。

【令和4(2022)年度】

最終年度である本年度の後半になって、2020年春から新型コロナ禍のため利用ができなかつ
た長崎県立図書館郷土資料センターの利用が可能になったため、2022年11月25日から28日
にかけて資料調査を行った。すでにこれまでの研究で、イギリスの詩人ブランデンの長崎訪問
(1949年)についてはある程度当時の新聞等の記事を収集していたが、今回の調査では、これま
でほとんど知られていなかった、ブランデンが当時の長崎市長へ送った詩の日本語訳(後藤武士
訳)が『長崎日日新聞』(1949年10月19日2面)に掲載されていたことを見出した。また、イ
ギリス政府から占領下日本へ派遣されたのはブランデンだけではなく、後任として詩人のG. S.
Fraser (George Sutherland Fraser, 1915-1980)が来日したことはすでに知られているが、今回
の調査でフレーザーが1951年1月27日から30日にかけて長崎市を訪問し、T・S・エリオット
や戦後イギリス文学の全般的傾向について講演していたことを『長崎日日新聞』の記事で確認し
た。さらに、フレーザーが、あたかも前任者のブランデンに倣ったかのように、長崎市長宛に詩
を寄せていたことも確認できた(日本語訳のみ掲載、ただし訳者の名前は不明、『長崎日日新聞』
1951年1月30日)。

以上、今年度の長崎市での文献調査では、(1)ブランデンの長崎訪問(1949年)についての新
たな事実を見出した。(2)フレーザーもブランデンと同様にイギリス政府から派遣されて講演活
動を行い、詩も書いていた。この2点の発見が本年度の主要な研究成果である。

【総括】

新型コロナ禍による研究の実質的中断はあったが、本研究を通じて伊東勇太郎についての新事実をもとにした論文 2 本を執筆し、偶然知ることとなった引田稔についても論文を 1 本執筆することができた。また、ブランデンとフレーザーの長崎訪問と講演内容について、新聞記事などに基づいてある程度知ることができた。さらに彼らが長崎市長宛に詩を書いていたこともわかった。

ブランデンについては口頭発表のみを行っただけであるため、本研究の終了後、できるだけ早い時期に論文を執筆する予定である。フレーザーについては本研究終了時点での成果を口頭発表にて公表し、これもできるだけ早い時期に論文として発表する。

残念ながら、本研究では成果を出せなかったこともある。女性のアメリカ文学研究者として活躍した藤井昌子については、本研究スタート前に調査した事実以外のことを知ることができなかった。藤井については冷戦期のアメリカに留学し、1955 年のフォークナー長野セミナーに参加していることもあり、長崎原爆との関わりと同時に、冷戦期の日米交流の中でアメリカ文学研究者としての自己形成をした日本人女性知識人としての側面にも注目して研究する必要がある。

本研究においてあらたに知ることとなった人物たち、例えばフレーザーの広島市長あての詩を翻訳したという後藤武士などは、原爆投下からの復興を遂げた長崎市で活躍した英語英文学関係者として、今後の研究対象にすべきであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 齋藤一	4. 巻 38
2. 論文標題 学生が読みかえるテキストー拙論「長崎原爆と伊東勇太郎」への補遺	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文学研究論集	6. 最初と最後の頁 35-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齋藤一	4. 巻 37
2. 論文標題 長崎原爆と伊東勇太郎	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文学研究論集	6. 最初と最後の頁 55-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齋藤一	4. 巻 75
2. 論文標題 ナガサキで「フランス語の道」を歩んだ人ーフランス語教師、引田稔についての研究報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 文藝言語研究	6. 最初と最後の頁 27-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 齋藤一
2. 発表標題 エドモンド・ブランデンと原子爆弾 長崎講演と『日本遍路』（1950年）を中心に
3. 学会等名 筑波大学比較理論文学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------